



<p>● 3人の研究仲間</p> <p>駒田浩紀 大協大学 准教授</p> <p>小沢明夫 製薬会社 社員</p> <p>井原美里 律和大学・村川研究室 ポスドク</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ある居酒屋で男女3人が飲んでいる。律和大学の分子生物学・村川研究室で共に研究していた仲間である。</li> <li>～駒田浩紀…研究室では助教。その後、別の大学で准教授となった。</li> <li>～小沢明夫…博士院生だったが、現在は製薬会社の社員。</li> <li>～井原美里…3人の中で唯一ポスドクとして研究室に残っている。</li> <li>・話題は、2年前、村川准教授を責任著者、3人を共著者に発表された『マトリックス結合タンパク質』の論文のことになる。</li> <li>・その論文は高く評価され、村川准教授は大型研究費を獲得した。駒田や小沢にはキャリアアップの道を開いた。</li> </ul>
<p>● “通知”が届く</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・後日、3人の元に律和大学から通知が届く。『研究不正行為にかかわる本調査』への協力依頼だった。</li> <li>・3人が関わった例の『マトリックス結合タンパク質』の論文について、盗用があったという告発を受理したのだという。調査委員会には3人別々に呼ばれることになった。</li> </ul>
<p>● 小沢の盗用疑惑</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初に呼ばれたのは小沢だった。</li> <li>・小沢は、英語論文からの文章盗用が疑われていた。</li> <li>・2年前—— 駒田助教は、村川准教授から論文執筆の指示を受け、井原、小沢らに声をかけて、実験チームを作った。</li> <li>・小沢は「イントロ」部分を駒田とともに書くことになった。小沢の書いた原稿を、駒田が手直しするという。</li> <li>・しかし英語が苦手な小沢は執筆に苦勞。そこでフォルダの中にあった類似テーマの英語論文を幾つかコピーした上で、多少修正して駒田に渡したのだった。</li> <li>・調査委員から、盗用元と思いき英語論文のリストを見せられた小沢は“参考文献に載せようとしたが見落とした”という。</li> </ul>
<p>● 井原の盗用疑惑</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次に呼ばれたポスドクの井原は…</li> <li>・彼女が書いた「ディスカッション」の部分が、その数年前に研究室の別のポスドクが書いた論文と酷似していると指摘される。</li> <li>・しかし井原は、二つの論文は同じ『マトリックス結合タンパク質』をテーマとする“シリーズ”のようなものなので、考察方法や論点の流れが似てくるのは仕方ない、決して「盗用」ではないと言い張る。</li> <li>・最初の論文を書いた「高瀬」というポスドクと話をしたのかと聞かれるが、「もう辞めたので話していない」と井原はいう…。</li> </ul>

<p>● 駒田の盗用疑惑</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次に呼ばれた駒田は、小沢の「コピペ」について、チェックが十分でなかったかもしれないと、管理責任を認める</li> <li>・ところが委員長の青木は、駒田が関わった別の論文についても聞きたいと言う。</li> <li>・『変異型コラーゲンの産生』をテーマに駒田の書いた論文が、同じテーマで数年前に書かれた論文がベースになっているのに、“元の論文著者”の名前が、共著者として載っていないという指摘だった。</li> <li>・その“元の論文著者”とは、井原の件でも名前が上がった「高瀬」というポストドクだった。 「高瀬君ですか…」駒田が当時のことを証言する。</li> </ul>
<p>● 駒田の「証言」</p> <p>ポストドク 高瀬朝男</p> <p>准教授 村川達也</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・駒田は、自分が得意とする『変異型コラーゲンの産生』の実験をポストドクの高瀬と共に進めていた。実験をリードしたのは自分だが、論文では若い研究者に実績を積みせようと、“筆頭著者”の名義を高瀬に譲ったのだという</li> <li>・しかし、高瀬は実家での不幸をきっかけに研究生生活を辞めてしまう。その後、研究室では『変異型コラーゲンの産生』の論文を新たに書くこととなり、高瀬に連絡し共著者に加えると伝えた。しかしもう自分は研究者ではないので共著者に入れなくてくれと言われたという。</li> <li>・駒田の証言を聞いた委員たちは戸惑う。井原から聞いた高瀬に関する話と食い違っていたからだ……。</li> </ul>
<p>● 井原の「証言」</p> <p>准教授 村川達也</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・井原によると、高瀬は非常に優秀なポストドクで、これまで村川研究室であまり扱ってこなかった『マトリックス結合タンパク質』、そして『変異型コラーゲン』という研究テーマを発展させたのだという。</li> <li>・村川准教授も高瀬を非常に評価した。『変異型コラーゲンの産生』の筆頭著者を高瀬にするように言ったのも村川だと井原はいう。</li> <li>・なぜ駒田と井原の言い分は食い違うのか……</li> </ul>
<p>● 井原の「回想」</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・律和大学のキャンパスを一人歩く井原。その脳裏には高瀬がいたところの研究所の光景が……</li> <li>・研究意欲とスキルの高さを村川准教授に大いに買われていた高瀬だがある時、生データの扱いや記録管理の杜撰さなど、研究室の抱える問題を改善するよう進言したことで、村川准教授の機嫌を損ねてしまう。</li> <li>・次第に疎遠になる准教授と高瀬。さらに追い打ちをかけるように父親が突然亡くなるという不幸が……。</li> <li>・そして、高瀬は研究室を辞めることに……。最後の日、自分がやめたあと研究成果を発展させて欲しいと井原に研究ノートを託した。</li> <li>・村川准教授は、高瀬が残していった論文や資料は研究室に帰属しているのだから勝手に使っても構わないと言い放ち、駒田も同調する。</li> <li>・それは高瀬が望んだことかもしれない。しかし…… 研究室に一人付む井原、高瀬の呟いた言葉が心に響く。 「この研究室…もっと研究に没頭できる環境になるといいね」</li> </ul>